

加藤孝造さん創造の道

人間国宝の陶芸家加藤孝造さん(87)＝多治見市星ヶ台Ⅱの世界を紹介する特別企画展が、同市虎溪山町のとうしん美濃陶芸美術館で開かれている。洋画に始まり、試行錯誤を重ねた若き日の陶芸作品、瀬戸黒や志野を極めた近作まで、72点を展覧している。12月25日まで。
(箕浦由美子)

瀬戸黒の茶わんから絵画までが展示された会場＝多治見市虎溪山町、とうしん美濃陶芸美術館



とうしん美術館 瀬戸黒や志野、油絵 一堂

東濃信用金庫創業100周年を記念して通年で開催している「美濃陶芸の6人の人間国宝展」の最終回。30代まで勤務した県陶磁器試験場(現セラミックス研究所)や作家所蔵の記念碑的作品などを通し、歩みをたどる構成とした。

展示作品は、年齢を重ねてなお大きく力強い印象を与える近作の瀬戸黒の茶わんや、釉薬が縮れた梅花皮の表情が美しい志野の扁壺、試験場時代に盛んに制作した鉄釉のつぼなど。19歳で日展洋画部門で最年少受賞した油絵や、試験場時代にガス窯で焼いた大型の虎のオブジェも披露された。

後進の指導にも惜しみない労力を注いできた加藤さん。今回の展示に当たっては、それぞれの作品について学芸員の與語小津恵さん(51)に技術的なことや思いを伝え、似顔絵とともに言葉が添えられている。「納得できるものを焼く意気込みを持ち続けた」として、今も制作を続ける人間国宝の生きた言葉が味わえる展示になっている。